

おもしろノート

多摩の野鳥たち 3

国松 俊英

私が住んでいるのは町田市で、多摩丘陵の一角に造られた分譲団地が住み家です。近くにはサクラのきれいな尾根道があり、緑がいっぱいのところですが、野鳥もたくさんいます。

春になるとウグイスがさえずりますし、初夏には渡りの途中のホトトギスが立ち寄って鳴き声を聞かせてくれたりします。寒くなつたいまの季節は、冬の小鳥たちが林で餌を探しているのを、見るができます。

朝、ベランダの戸を開けると、ココンという小さな音が聞こえてきました。音のする方を見ると木の葉をすっかり落とした枝に小さな鳥がいました。スズメくらいの大きさの鳥です。

脚と脚の間に木の実をはさみ、嘴(くちばし)で勢よくつついていきます。そのうちつ

いていた果皮が破れて、中身を取り出して食べました。小鳥はヤマガラで、つついていたのはエゴノキの実でした。それにしてもこの鳥は、嘴と脚をとても器用に使います。

ヤマガラ



カマキリの卵をついばむ
—藤富敦郎さん撮影

と額、頬はクリーム色、背と腹は赤褐色です。ツツピー、ツツピー、といった声で、ゆつくりの繰り返してさえずります。繁殖期にはおもに昆虫を食べますが、秋と冬にはエゴノキ、シキミ、スタジイ、クルミなどの木の実をよく食べます。秋に木の実を隠しておき、冬から春

嘴と脚を器用に使う“芸達者”

にそれを取り出して食べます。木の幹や枝のすきま、割れ目などに木の実のつがった方から押しこみ、嘴でつついて埋めこんでしまいます。その上から木の屑などをつめてみ、カムフラージュします。隠した場所はきちんとして覚えていますので、この鳥はなかなか賢いのです。

ヤマガラは人によく馴れ、鳴き声もきれいなので、昔から飼鳥として親しまれました。ヤマガラといえは、よく知られているのが「おみくじ引き」の芸です。太平洋戦争後も各地でやっていましたから、知って

いる人もいます。地方を回る興行師が縁日などに神社や寺の境内でやりました。

これは鳥籠から出たヤマガラが、お客からもらった硬貨をくわえて模型の神社まで跳ねていって、賽銭箱に硬貨を入れます。そして社の扉を開け、おみくじを引いてもどつてくるのです。

ヤマガラはとても器用な鳥なので、おみくじ引きだけでなく、つるべ上げ、鐘つきなどいろんな芸をやることができました。「つるべ上げ」は、止まり木から糸で吊るされた小さなつるべを、嘴と脚を使って手繰り上げるものです。つるべの中には木の実を入れておき、手繰り上げたヤマガラはそれをほうびごと

が、江戸時代になると小鳥飼育が大衆化し、ヤマガラの芸も庶民のものとなりました。そして芸は磨かれ、見世物小屋で人気を得るまでになりました。

見世物小屋のヤマガラは、「籠抜け」「はしご登り」「鐘つき」「将棋の駒の選り分け」などをやりました。いちばん人気を呼んだのは、「かるた取りの芸」だったといえます。

これは、ヤマガラ使いが百人一首の上の句を読みます。すると上の句に対応する下の句の札をヤマガラがくわえて来ます。読み上げる上の句はその都度違っているのですが、芸を仕込むのはとても大変だったと思われま

明治、大正、昭和の時代も見世物としてのヤマガラの芸は続きました。けれど太平洋戦争の後、社会のようすが大きく変わり、いつのまにかその芸は見られなくなってしまいました。

煮ても焼いても食えぬ

「山雀(やまがら) 金魚(こいし) 煮ても焼いても食えぬ」ということわざがあります。これは、ヤマガラも金魚も食用にはならない、というわけです。そこから、手に負えない、したたか者という意味のごまになります。煮ても焼いても食えないというこ

とを、洒落(しやうらく)でいいたのです。現代では、野鳥を網などで捕まえて飼うのは、法律で禁じら

れています。捕まえて焼き鳥にするなんて、とんでもないことです。けれども、昔の人は、野鳥を捕まえてよく食べました。煮ても焼いても食えない鳥も、焼けばなんとか食べることができました。しかしヤマガラは、どう料理してもまずくて食べられない鳥だったようです。物好きがいろいろ試みて食べようとしたのですが、だめだったとい



イラスト・望月 聖子